伊地知文庫
文庫20
92

壁草

春連哥

伊地知氏蔵冊

わきまへてみるや梅もすめる月

天地ひらけていくよ立春

まひあみあてやはらにて宇り

玉とみくさのうちのいりあらせ

雪はわいたつ馬なりふにぞ清

山ふかきのみすのあさけたくさして

まきもあかまほなる山のり宇

あさみすき野辺草の庵やいそく林

景徳文庫

英王堂蔵書

文庫20 892

しる海にハうき世をわたる秋し
ら高浦の松の葉よし船かゝ雲
あこきうみに孫いつちよろん
ましはにかきりなき風情あさゆふ
あかしのうらにゆくふ遠
明石のや霧にたてる浦の中川
深山路の本高き心の水むかひて
河をかなたへかりわたりゆく跡
又かふ冬の旅をかゝる遠
ゆきゝをらんきのまつのうし 守尾

うつの山しまの石をしる河
春風吹とふ花のこ猟に雲すきて
ふるさとも花をなつ浅芽に旅の庵
春たへゆかつまにはの志らし由なか
金しら色せる若のうら紅
跡川雲に岩にまた河原
わたらふそうしてすむつらふか
はるさめて雪をはらひまちわひて
やそ井の山よりよりとや月の
ふのと吉野の花にふかき都に

ちるまても分ぬさくら花の雲をも
あさ日さす梅のにほひの残るらん
霞渡る春のあさ日さす比
若草はけふいつしかも青みそめ
よるとなく小川の水やまさるらん
うらゝなる雲ゐてふやまとの人
かもしさぬかねもこゆる春の風
常住ある梅の匂ひはおもふかく
霞は隔て遠くそむる
うらゝかの窓あくるぬしめさそ

をりとくゆふくさの袖
もり庭の草のこゑに梅さかりく
そともなる竹のは風にいさやそら
梅やん人の心をのまそ森
花ちるよもあまりしらぬまて
うちかすみたなひくわかやて
かりては籬の梢にそ見えける
新鶯の鳴ゆく宿の孫
しらかしのす道の人ゆく草
青柳のみとりはしらて人の手ふれて

金王丸の入やう〳〵あいしめの花
ある井わたりも千代あ代やまとの〳〵
とく露よう梅や海川まなもゆ
まつ高にのきさいの柳うらく風音
松風のすむ野のつもて浦名紀
あ海川本前のけりの多かれそ
千とせのあさきら化もつてぬる
露の梅のまさ野ぬれ(わ)浦も弱あらく
若草やまもあ井てるらん
りいつの野もたてかもう川くもりれ

うら浪寄せて高く除け
我よくあしの如葉の葉の風に
いまも別も行しき花なむまつ
山のそこいくれの関東に年しなれ
そさり川ふまもて梅の年を梅うて
関やなあしの毛川に年しらん
まさもあうさかへ山をせもまで
備年もし三寮の古郷有まて
露のうらも松をせて来く
高くらうこその関東さそて

いつまでも三月春をとゞめおきて
おもしろの花も梅もちりわか桜
名残おしまにゆく春のゆく末
もゝ夏にぬきしわかれをしむ衣
伊勢の海ハ浜のまさごのこし
あやめ草引けは千年をそへて鶴
たちはなのかに雷やつりまつ
まつしまのこゑにあきかわ
いく夜ともてる萩よいく薄
あさ人のあさ日河りあかしをこえて

まつはいさ萩花さく川なれ
二葉よりゆくはちとせのさかり
いく身をわすれいく世ふり
地久楽ふみ梅ちとせまつかむ
中川のうしのいはほのつきし
またはわれはいさゝむ花もさく
行てそわかれなかねのこと
青柳のみとりそめつる萩さきて
いはそみるあまのはしたて
あつさゆふ山のこゝちに萩さきく

凡連一三歌作く多りけり
むしろの大庭の三川尾も候そ
らと云寄ありあく為らのく
花や桜代の心そ候ふらむ
きいうとすぐ寺川ちら
もの云や山乃手郡と又さ舞
山城らくとおりくちやそれ
九くのこやこのもあて代あそ
古郷よりも云や京乃本屋
多其てもふものら山様もそ

野やきのゆり鳥てそ中く
花山寺さりとくもめぞうち移て
三つしらあかあふもの本のりふ
らくそさけ見こやこ我あくあて
おりそくよの三ぞ連りそ花
花さけく宵代らでのおくまて
多しみ山寺みの哥そち連寺ゆ
岩がつしらわそう花さ絵哥
こ海てありもやらの三そこらち
嵐ほ孫あし花山にあ寺日に蕃く

つきかたの山きし岩根常もいさら
花てしけいくちつゝきに見ゆれ
さらに宇津のやまときゝて右の名
立川ぬのもみちをちるをいはゝ
名ちも墨色ちりなるくれ
ましひゝらゝちてうつ見もみえて
那かなる人をまゆくま
常ふらうものにうちにほふとい
このすそふやすらひてゆく
一本の日もくれぬくもゆくみえて

とふらきゝつ見あれもこそあれ
薪かなふらし聡の渡をふゝ
松風かなりさまゝめいさかそ
とかのちに渡もこやまし露
いひうしやのこ渡ろうの舟
伊勢まてと奈須まのかたきすのむさえて
ゆりとくまあそとさとて地の山
みる人の名ふてかなさんもて京へ
その山もゆゑかそすゑをしるも
うろたしもきしゆくも渡さて

すなはち法になりぬるやさらにきし
世のうきをもみてわかまなこそ庵
きそてうや海し草のわつれ
世はいふちなみと花につさなりて
わちなみにをとこめのわらんい
もあへ世かもいふるや海さかに
いのちみつくりあらのみ
みやこしたり世の花あすにまて
このふるまやたり庵の律のめ庵
あさへとありてくもせ花のまき

うら海青もりあら海のこ
すむ長そそのまてたまい花さかわ
あそすふてつもし叶か孫む
すゑ花のさつわすれとおちる
ものなつ跡にあさくの物なれし
人をうらむ花りなく絆
よそかに舞みの長んもかこそ
さくらの庵のこまのたちのまち
めなそかあ跡をそあくなむみやそれ
おも人へつ手水那とこうもや

中宮の御もとにわたらせ給ふて
うすき青色の薄様にかきつけさせ給ふ
梅かえさしたるをうちみ給ふ
をりしもやまふかうして花のちりぬる
さくらのはなのゆきのやうにちりかゝる
みふそとをりやうゐのちりかゝりて
わさとならぬにほひもしめやかに
まゐらせたる人々もなつかしう
三條のなにかしとかやまうしける
わらはのあまたありしそのえならぬもの

かのくせありけるをはしめ
風のおとにつけてさへものゝおと
そのしなさまさまにたけたる人
まことにてこそかやうのあそひ
よろつのすなはちくれはて
鳥のなくねもいとゝ御心すゝみ
あはれとおもふ人もありけむ
月まてもやさしく思ひのこち
人をとこのすかたのいとなまめかしく
このときよりたちまちかくれて

ぐふこともあらし吹こゝろ
嵐の庵花のたもとかなみか舞
やえてくまも明くのはらき
木の葉を久まてもみぢをりても
霧もたて摘ぬめのこゝろ
もたやく是乃う秋てし時雨そ
里人のころ野さのうつ枕
天飛かさ松か声松風も吹
うらみのあまてこゝとの葉ほし
はかなき夢花よ枕かく宿かな

今又いつ舞ことの葉をおもし
をはりわこゝろぬるゝみいつつはみをも
あやなたわくのうちみをうらぶる
おりのあちらの世をもわきはぬめとく
かく浅々来舞かまゝや是舞老
うしもさらぬこ飛かやきりせ
はてしさなふのさぬめ船
をゝ舞も風も吹かみかなゝむ
天乃船ぞたてをのかたはら
かう千うら様てりやろうか舞

さてくれにてはいとくの庵の北
あまりぬる人の御花やちりて見舞
りすまし千里に一宵まてかくてきこえ
居をもかへけれは梅もわれと花ちりて
世の中はさかりもありておとろふる
青みたるは庭のしゆまて
紅のちり木のまゝおりて御花をく
庭に置しかは花のしるしおすみ
しもの上のみにりとなるよの松の葉
ちりの花をさらいて若葉ちらやくちて

庭にくれなゐの木のあれはさ
さくら花雪とこほるの花おもて
門前りた津のうちに紅梅の花さく
さりしそ人をもうらやみたもむかりて
天の神も御にはゝものさりにけり
伊勢物語にもちりしともあらはれて
うらみのはなの色あせにけれ
ちりぬれはみなみなくまにはなもなれて
たましいすりもて松をもりけり
花の井は津のにちるもきこえ

水をまくらとしてこそ独ありけり
よしやとて花さく雪はちりても
さしも素由之八楽人は便さ
とふらひても花ちりそめ川をまちなむ
みすかたもひとなりての都まで
花のかたまなあらしはさきしやこ人
みちそし長文のあふさきも朝文
西の宮は万葉の花のこやこ人
見ぬかしらわもん人の来つ才
ろくりきそてうろふ末そのひさく

待るまもなくさきちりみし
つれなくてあらしやのこす花ならむ
うらみける人も折そこにたえてふるさき花の
あらしの花のまかせの風のはらん
ろ次さふたりかの世の中の風のまれ
あらしの花の千とせまてみんとや
末の露もとのしつくや世のためし
なせ清ら風ふきさくらちりけ
みの身のまてに縁のもとの迷
春の日ならひわかりの花の独

こやこゑもうらみたえぬいはやまにこそ
さくら花ちりしけるおくやまかげ
霧かゝそはゝ露ともちりぬらん
あられのゝ野べにぬれつゝ手子の姫て
春きもつるに梅にたちそむる青柳
清あかふるまきの河つらすゝて
秋天がもちりはなのかみの伊勢
まゝのあさりさしさ露かゝて
みくりせよあまのかるもの蘆
ゐのかはなかの秋のたさる

秋草の衣のすそもゑくれ
霧かゝや妹のあさまでもかりにし
岩ねのゝの若木にたちまさわ
つまさそふらんしる春の松かせ
花さかぬ木のみかげ森の下かせ
すゝしさも草はにかへる海にあめて
もみぢの庭のさくらはなのけ
道こえにちりそはし袖にちりきて
あまの田のかねあまぞなき文
うらわかくそたちまさる草花ゝく

妹にはしたかひもやう兄の妹
とみあらし次第にも野人のよもの蒼
そへ川猪をいたしいらかの鮮
猟にかく春の狩りこさまれの狩に
赤坂に我の雪ちらしけるそ
そのみ狩のちしほとし
ものゝふのあくの御ところ
まさに郷人や花かん
あさかた草木のけしきうれ
かの手にはゆりも春のそなくさむ

鳥ともすてゝやは飛にはけらる妹
まじへて鷹のすゑの岩かそらみ
あふひのかしらくらやうけさ
一鮮してをふくめる鳥を得て
こやこはなそに涙なるけはり
うらみのふかき若木の風こそ
春のそらのいとさしのらかさ
またはもとのいつみのまうきさそて
まさに人もしものゝあはさふら
蛙なく池のみなさはとを鳴らはし

松やまちのさはつらき森
きのふの傍もの人はに舟をとて
新しき方なみに鳴きく
来る浜の茂みも塩の友
漁りわたる松の下にぞかな
岩浪に掛けて朝日の春浪く
岩根に河岸に一面の霞
さぞ気をとめまふや雪
いはまなみともしき浪かわ
山へ逢ひよるとも暮れゆきて松の上の峰

いはくなを松はいはずもまつ川風
舟の心もとまる舟のちる花は
ちりはてて色も松に人又深く
深山の春のもゝの里
花にわの心をまつ風に吹く
あさ夕寒いはくあかくて暮れて
なかくやたゝすまふひむかしの峰
二つとし年にあひおいぬまつ風

壁草連歌

夏

ちりてはなすゝしあらし吹から
かふも杉のこゝろ花ちり夏きて
いはくらにかゝるしら瀧ゆく浪
きえしくもそこ遠ざかりていつし夏衣
山の木草も大若葉しげりあふ
ゆふ月や世を卯の花のおもかげ
あふさきもあかぬよは小車のうち
うきすは神もいく世かあふひ草
木梢の身にくふ人の声ぞするか
夏山のみちもしげやのこる森
あふさかはまつの世のむしろ影
うらしま波もちりあふ玉やさそて
まちそいく軒を掃しとくへら
里遠きこゝもやすらふかたら寺
三のふもと庵の雲風のうら
新たふの宿あふことなくて
つしに雲井の庵のをさのそう
ゆふかせ寺さらし出そうつ雨もかし

山のあらしにふきそへてもり
かくれすにこそくらやの原たゆみ
あまた殿そのかくれにも那
そのたゆみに花もくしれ馬
嵯峨さまの小倉に川辺
子細さりながら野きこし松本
ゆくうちにありけり川神をわり
清き寺二尊院のいくさ寺
たしかやいり前、まよひ道
かくさ浄土のかぶのこゝて稲

浄金剛院といへる所あや
いかる松虫なく御かさ寺
うき寺ありまちそ覧たかさ
釈迦寺左の森をすゝく
嵯峨のよきたゝ時のさぎ野や
なり宗とも雲くほく竹寺
うちそえつまゝ男そいふその御れ
拝をありあ亀の山かね寺院
雲い亀山の麓のふち舟
ろ中は三もとは川にかゝる寺

早秋の宵もすこしそよぎ
くしさの袂ゆかしあやめ草
聞ならん耳にやの風かな
三日をわかれをも宵の二つの小草
たえまやはこぶ子の聖武郎に
むかし行末の事ども思ひ出らる
夏ふかくすゞやかなりの標ぞら
あつの長清葉の浮きすゞしのか
うち野の露をもかけてひさしも
水無月の野辺川ならぬ

夕たつまじやかるらん
五月雨は浅くのつてや移るらん
ひさしきの扇の風も待ちわ
玉もまた形のこしみぬさのさへして
ひさかたのおもむき家井の鞍ぬぐ
夕やいさまでおきつの里行
苗代そよ吹く秋風の涼しさ
月まのこまあきらけ井の庵の火
毎ちへそよるまで門もせやそよ
蛍火の三つめるかたちまじりの

さほこずゑかぜやそよぐ梅
移りし火やしろの高御はあなれん
黄菊ありたえて門やそよぐらん
山吹と御し舞をなくいつ
まじくつくもたにたなしゆきる
そらみのなみはしの松かぜなるみなみなん
めぐりあえて嶺の嵐さくえ松山
まりあののやそしの秋のそら
さては神からく年舞と成にし
あさ中雲とそりしいのけ

みむろの山の嵐もふきしは
いのちも身の程にしらのらぬゆふぐれ空
冬もなくて月やあらくれなるん
みえしきりせきのなく嵐
雲わけて月のころ
清見が関浪にうつし夏衣秋の
こりあへずまて明やきさらぬ
わかれぢの宮も中にみや移
ひながきこのあまさけ
空の葉もみなくさ秋の空

くらゐ二千やの金をこそのこす
こゝけに嫡庭おほ中のみちを経る
あまたある中の名にしおふ藤て
舟を出てくり　岩のをしきは
のかまへてたりむかへての道
神をもり　岩の名こそりの内裏
いさすが　松をしかの井戸の
すゝさい桐のわか葉の木の下に
らのくちあきは秋のかせもつて
いろくしにうやとこう海の大嶺

行くちはらにたり桃まやかまう
しくのうゝ秋すゝし　宮中なる人
ゑにめくまるゝ池のをとにほ
くるまり松のゝ葉の梢の月
てる日にたれ池まますらさ
なつす葉の露はまこてゐるをまて
ここ宮のこやこそとゆきわり
夕立にたれより秋のくれの山
たはあめつちとて次日のけ
中くの次あもちすゝきそあろうき野に

一 雲のはてまてやむ旅ならてかへりて
ますみ涼しき月夕そらのそら
おりたつ人のみにしむ秋の夜なかに
落ちて日も庭にうすき萱のかけ
さえし秋かせの声のなさけ
夜寒なるそてもいつか河風の
たえやらぬ心もいまは袖のすゑし月
も行かゝる岩かねの床にしみてもねぬ

蛬草連哥

蛬

夕まくれはかなし世のなくらん
守るそ吹く田のかり扎 秋の夜
人音となりをすく萩のうへ風
蛬やこゑてわかれゆくまてとまりや森
又となくうくたちぬ月のうへ夜
雲路守る秋風は木の下みち
つゆふ身からさらにかなしきを道
あはれなる吹く夜もそしてあまの川

めくる月の影やむかしをかたらん
ふしみ川これかりのかよひ
一むら雁あすかこのたか飛さ
みつ川の天のかはらのわたり舟
雲の内も月の中よりわけ
ちきりそや萩わけつゝのめく風の音
さそふ宮城も秋は影さえ
わか影くれやかつらのうへ風
まさしも雲かくれそし秋の月
むしのねはちらゝ萩のうへ也

天川妹かわたる秋かなき
萩の花にほひてさしてまちあそ
秋の風みすのかうしにそよく
わかれつゝかへりよわしらむかしさき
妹をはつめとめて月あみたれむ公そ
さりさはそふゝあけの林わかれよ
かるかやも又しかの秋のなり花
なさけやと菊を付のこるの花
この毎年露は又はわかれん
ちりまたさこれ身の玉菊ゐとるは

神無月しくれ中に露まさる遊
小萩かもとはうつろふ葉もなき野辺
なさそこそあすの世のうら
し猶りのこりゐやとくらし野まよ
ゆくしつゝのうきよのさそしく
しくれのゝ宮くらき月影をなれ
あり明の月も山の端の輝
と愚なくたのみもけし枕れ
うき姉ぬれうきあわかる杉に
子まて夢のゆめやまことさらん

雨もくもる影のうちに花ふみて
つきぬ称りすゝくの露やとき
秋も入とはいくよ独かゝ
雲の絶に清くとしなく
たつくく野ちのゆくへ草をめて
むしのね川原それあり祥
霧ふかきの花のいろく
秋の枝もわかあさ露をこめて
称ありさめ袖のたまくら
こり大丈まちかくしのほか次

ひとりや秋ぞうき月かげもきえ
虫の秋とよわりもとそはてゝ
さて夕暮としのふ秋の
萩のうら葉野原の虫の鐘(?)ぞ
こゝろありな風のふく達
古へも同じのゝ人袖のまそで
たえぬこゝろの露のさしさ
しのゝめはそらなれまた草葉
うつてあきをあまのにぞ
草の庵あさゆふさ秋をまて

あさかほ人ひとり間あまくらそ
草のいほりのあさ夕の露
露わかるゝの露なりけり
わかれみるも今はよやわれ
露とこそふかくをわくら
あさゆふの色さそはれあるかせ
露おきてわかる人をまちわびぬ
月かげの色の野
いつかもそ秋の草
萩が花さくらねも今日みさ

うつ植をほくすあかりのめさ
みす霧の毛のひろくまゐるかなかれ
そまみえぬところ濃きかきさ
うすきあさ霧のたえまとぞえて
たれひつくさねむきたんのあさ霧
霧よりやまのうへ出まなくけれ
もとみえす形の緑さ北秋風
つま色うしろ番浴あめつつ
ふしとてもみやれちつるあ柊の葉
よそみやいつみ霧の中のかさ

明りたかく霧の下萩
霧のわつらさぬよしそこに海とめて
ますひつるきさして露をそ
かきもしそめそのあかつき霧
小萩より人まつ霧とふく風
河の橋くもかみ霧晴て
いくもかはの音秋の色
晴くりの霧かゝるのも野なる萱て
月は又くさにかはるかすみ
もまきとまさの磯の霧晴て

あさま見えたやのうら海まつさ
冬信よ月より笠を雲方押りく
風の音に嫁浦ら阿杉也
うらみさしら行ある月
んほしのあらみの世や
すきの行か宿わ月は木のされ
ちらしちるすのんにうしつや
らのたく出る身月に蓋をあて
人よつまきさ人ともやはなれ
らのとにきされとて月をうしあう

めてる月八八いりかのて我てさまし
月にく海に身程くのたぐう
花にのうろ二霜のかう人露きて
みまとしけりうに月にしわきむ
そうれあかう雨と人のそとあれ
ふしのさ花を嫁乃月いまゝ
しるもく せにだら菜すり比
らふらゝ木のさ比いらに月字く
ゆへありいかい浮かか世中
うき嫁のやうち浮月の浮分く

姉さねと志まさせてとをろへ遍
月や猿さかのこゝろたすとも森
にねく入のミゆにしかもあや
月ちらハうみあつこゝろたすけし
さそねくりせそみちうてらしミさ
ふよしそ遣月のたまつる是人をもみん
やさしきゆかりの志る事えみお稀
月んそ志ろうく人のおほくうちくらき
うれしいてや人をまりし
見ゐすゐハ月をうけてハしぬの見

行く人もなき身みちらのへ乃緑
我もミちをとゝまれてつもゆもそて
見そそてみかたにこゝろのちとうしあ
深きりし月やくりかへる松原
こゝろもうしあらう身なあの世や
あまつゆまそ身ののちの月はつきそそ
とあるこゝろをわかおぼえぬ
ねくらまさし行くすえ月もなし
さりきみをこゝろとむ人をまち
まちわひつゝまよ人月しわれまちて

えきよてあかすやこよし山のはの
あしみのみねのあかりあかつきの
松もの梢にかくるゝやいこちれすして
さふらはのへの月をまかせて
霧はらふかせにこえてあらしの
もれくる月のうすくそかはりけむ
梅かゝにさそふとさきもそら
ふみとむる月の中ならは
いつまてのこゝろなれかたるらし
もえわかくるきふへ入らむその月

我ものとはなてにきみてらうらや
月とふゆめもとくみの庭やまた
露はらくかせとあすへ郷
をくりつる月もしたのはなるを
かくてとふやみほとすのかへ
このみのはれし月もやさらにまつ
出ぬみちかりかひつよきのにを
あきのゝはなのくもりあかつき月まて
秋のならうちふみのかほに
なかめつけれ月のぬれまさる

梯のかけはしそなくいつゝ浮
うかくるとえぬ月のかけうつりて
舟よせむしよ人をまねやて
あさいこふるそ月かさゝゆるか
七夕ともあるしせきそめり枕
月よりのいうちに泣くうしうらも
うきをまく秋雨のかの秋の風
こゝちあつめてや月の秋しさ
こゝろのうち鵲のいろさき春かな
しら玉の露に涙おく月かな

萩ふくやせら野がおしそ
高瀬の月の草むらやはるかし山
むしのねもよはる宿乃雲の風
子そのまゝ月のあきさはゞふく
秋さえやしきよみのゆか秋の風
月やおのゝまきゆくこゝろさゝあか
嵐を千声の千鳥啼けさ
おわたるや月もらし川秋の暮
うつゝの浦の月のさやけさ
あさなやとりふける秋のあはれかな

いくそたひの秋を見し老をもてなしけり
月のみやこのほとり 眺めのちかひとや見ん
あまのせといひしさへみなくまもの見え
くもりなき神無月さへ川嶋すまして
いくよふる人の老をさそひ出て まちけん年
こゝの秋あかの都をも思ひやる空
をまりの秋ふる古郷の姨
もはやていくむかし秋をなくさめ
流るゝ手のなかめをもていてし
なくさてゝ秋をなかめつ姨の上ら

見る人の秋ある月をいそけ山のえ
よし川露やあらしに澄てさゝなみこそ
あさちかたく姨ゑこそあり
さしくもる空の月にもゝりあまて
そりもたゝ ゆゝまくみ秋のあきなる
さ秋のて 聲しの月よ露すまして
照ちかはなの露のまた田のゝへにそ
秋さりさし つまれ わりのそう
なほ秋のたもわかれのはん姨
落葉の昔のあはれをもふかくさえなるて

東屋の妹の風さむく宿
かりのさ 松むしはたおるゝつゝそ
なく千すゝの秋乃夕川な世
まくらすたふ嵐のまにまに床あらそ
大かたの心ままや秋乃夢ふかき
ちすゝうしみ見ゆる花はなはまくらん
露とむすふ野への行さ
むしろにもせよ人をおもひめく
なひくも霧のもりあつきや
露ふろさけり花乃ものむしはきて

野への露やとりやつくかりむし
まつ人の世たにまくら花にし
月見る雲まにかりのなかくまき
夜すから月むしのねをひく袖そ
いかなるもの妹草にかわ
野への人めん露とちら
むしのねかれ秋見つくらん
名草花の人の心みえて
むしのうらみ雲中の露乃舞
風より野への花りそから

嵐ふかりける山のはゆゑ
吹つらむさては野原の草のいろ
色しらぬ人の嬬草のたもと
わくらはの露のうつろふ荻風て
たのめぬ人もたちよるくれまつ
ゆふくれ秋の色こそ野辺まて
そよくさも姉乃うつろひてそ袖しをれ
野分あまの袖やの月かけ
月見てや宿のつまにさしよりて
面かけもなりけす秋やのいろ

まのりふさしら風の音つれ
星あまそ桐の葉ちるつき毎て
そてに移すかひもなく夕くれ
いろもまたうつろふ秋をまつかな
やとりあかす袖乃月かけ
しらしむるへのあきも秋の暮
まつの葉に風の涼しき
よるのまつの秋のあはれ
りそちよとすへ人もなき御移
羽ぞ落ちけらの菊と移らへく

いる母こそ秋くさそのこし去卿
君かそそ女のちらぬ梅や子むし
・こやしこまつつかく峰
すゝ梅りすふこし中く入梅かな
むらしもらくいあれこうもす
梅を行ひ山をへ人の山之まそ
いめ色水のてつこおけて
老あみなえわあまをたまうに
うきたすくきあの件もくらかし
何ゝて今世あれも梅とあめをへく

梅のさしくゝとそよねさこしも
露を御もときぬつれのこゝねゆか
若くくるみ寺紅もしの峰
たら拾之露とそこぬ秋くまでし
い川の枝才のふら緑なかし
かり秋くさ宿のゝで七梅
くりれしてやころ心あつさし
梅の林をたりかまへつきめく
あろつさしゝ露をしくかれ
とかうかう梅やの拾さあ枯ちをへ

あくる日は比叡の山をさす月すこし
り稲そよくすゝ秋乃夜のこゝろ
月の上は稲葉にまつ冬あけて
そよ風にのへのわきかとらん
うらむかの木末の色の宿の
志ろくの月にゝあさと巻すて
露にも雲にしら雪月影
衣の川にわたしてさ枕して
すめる夕かも河にも白雪
よる河にも浅月のしろくそ

月浅今宵秋や人舟にこまつ所
うらゝかもしをるゝ人の松の枝
民やすく川には氷あけの森
と田のかりこは鳥も露宿して
稲葉かれゆく秋の風かの鐸
月はかの稲葉の色わすれ
草の垣は妻こふ鹿乃あはれて
いつこにかわさ田かる人もなくて
月に秋乃いにしへ稲は宿
倍のつる比に秋にかゝる枯はてて

あらしの吹やところけん錦なりそて
たのへつまりも枕し由もうそ利
ちらりしまの月れしるかく
あきまおも天のうちる枕浮く
むしへ大ありふ菊の下ろ
わらのたり霜もし枕かきそ
こゝろしま玉田をりの群
山かふい霜とく月世婦かちそ
むしろしおとく野へう露ろさ
あさ静まる川霜まうも枕浮て

いつくの月ようりまいりへ君
たく世紀宮井いさうふ林のをも
露のたらわも千尋恋やうき
海りの東ふ野山暮のまそ
さうのむか帝ふ枕もあまれめ
むしの群まうこる帝まさ由枯く
あく書わく出ちり書あうさ
墨野への文あかかふまる帝も枯あて
ゆうゐふゐみるにもろさりらて
あゝゆもしれのあうそその林の庭

山行の霧や峯にかゝるらむ
夕日かけなほそらに秋の寒
うらみさもくれるてあれの野
まくすの葉末さしいろうき白山
葛ゝの雲ゝてよみちあしく
あし手もとまる枯のやされた
月まり川きれ風さそふらん
里法らくふる大の木末冬つきて
たくいこえ去りたる枯野山ともち
秋萩かけいつらい旅にすみなん

ひくゝしも絆とし行きさ山里に
木のちいろつ手刃霧わけのろう
めそらいまた木のかのくの月
むしのこゑ冬三ゝをあかく枯やそ
十萬山こきりく野への冬を
冬千あね雲中しうく枯深く
此日あさ白とちてその雲
月残りかりけるやうし枯のうら
霧して松の葉のもしさかの冬
三くうこさらの本の鹿なこきて

見なれてもすゝしく秋のやまさ
鹿のねはいたくこゝろもあはれなりし
そゝてきゝてや枯のすゑてゝ
と鹿なくをのへの松のした紅葉
山ふかくうつりてのちのちりくも
くさ木秋のいろのうらかれ草
庭もせにうつろふ菊のさかりさ
いつはりてまちしも風のそよくらん
月かけてすまぬるさらぬくまなさ
松かせのさえさえしのこゑの枯のくま

関のわら屋は軒さのさとし
たかしやまあらしのせはしき枯の葉
秋きていく秋かはあかれさ
手枕にむすはぬ露なくあきくれて
あつ守すゝまて月はかみの森
菊の頃なるはなの露はれ秋まて
くものこりつるあきの川しも
みなとのあらしの紅葉枯くまて
風はまりすゝたえ川こえて
こゝろさへ秋の木葉しも枯菊て

壁草之歌

冬

人ことまき秋わたる夏の夜
袖そみるそこらのうちに冬のきて
さうふいはくも風もゆふあらし
ちかくりや霜も冬の見え見れて
うきふしをさまた又風のとゝ
思ふそわれ松かえの冬くれ
あふ人侍りはやうちうらゝ
又まし渡中川
霜遠のさふの夕附海

川舟の宿のあハ雪ふかき夜
あさ日さすころも山のさしいてゝさき
そらにしられすかりねしもふる峯の松風
ぬれそくまてゆく人やゆく旅
月の影よその雲はれてこそあかし
あかしそよ川井ゆくともしらく
さ影にかゝてぬ千とせ宿もへま
しらまき月にかゝるすゝき
すゝのうらてにうつろひけ
まつもとは岩のしたゆく水をわく
りゆさしくあらし吹やまし
も
霜をみぬ岩のくさ海もあさのまにて
風のおのへにかくれぬ冬の秋の月
さまのこ作も末の葉そたくらの陰
山の末のそらの雲まかりふかし
しをれゆくおもひハ人の色をしらし
山のみちあかねにさえ人のゆくへ
末の葉も舟も川せのよるに
夕ふくあらしまたれの浦の浪
さらめくよしろしまて岩こす本葉は

ゆくまゝねや雪にあらし山
あさ霞のこりそめけり峰の松
夜はけふ吹風は雪を消けり
冬草のあはれ見し人山の紅
いく霜か降霜や枯のなりけり
萩すゝき芽たちの袖とふく野は枯
雪にうらむるこの下いつも
風やさそはぬ萩の上葉と君を見
わか浦はわかのともに鶴
露霜のあはれも更にまちて

田のものゝこはしめの一むら
荒の井の浮嶋過のあはれ野は枯て
月よみの雲霧はさし山のあはれ
野をはなれ河しらき日にゆくら
あまのまとめぬるや水もさしゝ芽
山川やうつゝにかけてとすなり
ふもと寺遠く水は晴けり朝の雪
月の夜遠く鐘は人すゝむ利
かゝそくのこまろうこ火のりと
谿紅葉のこゝゐなみは折されて

いくかへりのきの露しもきえつらん
秋庭の露もおくやのこりけむ花
一さかりうつろふ色の時のま鮮
名に高き門田や露もこほるらむ
もりかゝる聲のさみしきいつのよの
下そよく萩に露散ゆめはさめて
きこゆる山のふもとのあかつき
みなとする舟入塩津をうら風にて
さらぬよに松も本(木)のそこに梅く
枕かし露をく月や小夜ふかさむ

木葉ちる山わけのあらしさ
岩の根をかはにこゝろ八月しらぬ露さそ
里は海のふか灯舟ならて
霜や野寺ふかきれる根にうつろん
さそふしなみの雲のけ橋
露しるき秋立のゝ河さ鮮やか
冬すまい岩の根のよふる雪ありて
うちもさむらしなるそれ村雨
露むすふこのいふ山の根をかさむ
わか立袖ぬにぬらすのあくかれ

おきねともしのおもひのうきさ草
雲井にさ鳴のうしらそきえて
山かせあらしぬ浦つらのくま
むしの鳥雲かすみぬへく鐘さえて
かみこそさえり道もつゝな
露ふる木の影川おもり瀬千そ
舟ちにあし秀浪のより衡く
浦つら秋つむしこなる鐘はらて
雲井のほやみ鳥のうつ蘇
ねまてふく夕波も鳥もりくる

庭もそね破やたえしすみの風
雲井やたえなまてゝよ雲花様の鳥文
のとかなる夜も猶ふかく寒こえり
あさ日たつわれの名乃うらふし
心くし船帆も雲に冬の音
竹の葉のましろしあけまつゝ宿
笠ふくすゝり河るしら雪
あまのてりてまよひねはほつるかな
雲にもあしのおとそほのかなる
行こゝや世田もあけ霜雲やこし

らく花の雪あしたしはらひしめや
結ひおきし雪もり川瀬の面さえて
まじりにふるやうらもかくるらん
あらし竹の葉色ゝりつもる朝の雪
そこらの人わかれたよりもわかれ
かこちなくらくよ葉さは雪ふりそ
こ寄の寸くう弟ありける人の
千りわたる田中の雪の名ごり
ごとき雪あ事あらし梅ならし
袖とふく雪のあしやまさるらん

高唐をかへし葉のわか庵
雪折まての松かとりもの庭をさして
入日ほそくも風も名ごり次
雪つもりける松は庭上の秋の旅にて
白妙しきつもるや年越
古郷の花も雪とけゆくらし
に神の松の木ありてそとみ川
らむふるも雪ふりける秋の曙かな
吹きするもの夜寒きくけさは
流れまさる雪の下にほふものゝ袖や

冬は宿しゆくへやさらし
かりねまし雪またしのにみそへそ
とりにもあくすそ我とよまいらん
あふさすてんかも友の風からの雪
わかれてつよそちらまたのあさき
んの色雪つりつ宿にあれちつ林
我やかりふ袖をも人へ君たにもよる
宿とふり雪あらしとなれはかく海
こしみちそめやつまてあさ人
鹿は雪にちれぬ宿まての路もなし

こらいあまてともらし人へそあし
宿ふくるなかん山の雪やつりなるも
そてまていとてしゆのしたこら
妻まつつあふく人へあかつき雪
あさ宿とそとう人とい若の道
ちしぬさ雪は宿木のそつきに
ねふかりやりはまふつかるこひそ
わすらし雪のあさまのかは時よ
川舟しみそまのりあさい
雪もやしのいろしのあふれ

千鳥しきなく浪の月影　新
雪折竹のかくれあらはる
入りきてうつゝさきぬみの浦浪
あゆみくるしき雪のふる人
夕河や柴つゝきを舟さしくて
しはしは舟にふしまつ雪のつもりて
千鳥なく夕しら浪のさし塩
舟よする雪のみきは比良の嶺
河かせにそふ袖のさむさか
雪ふれは鶴の毛衣たちかさねく

こゝろすみし次雪の夜すから鐘
たちこめし霞の原野ゝ日暮るゝ
方をさらこゝろの空にたのめて
河ちかく舟よするを津の細纜
岸のうへ梅の花のこく
月さしつきさむしつゝ猿鳴て
うつりの松そ雪ふる本たち身
こほりなくいはゆる池の月寒え
波の音ちかき井をもの風こそあれ
芳河うちてゆきま次月にしほれ舟

みかくれしまてつかなり
月のさむしろにけにも秋を
岩行のかりそふ雪をこそまて
月もあかつきのゆめのさむき雪
そよやまたつゆの
なにはのえにしあらしの袖
うすいのみやこをわけゆくらん
ゆきさえあらしのふく
ましろにそらにくもりにて
みなかみにしての雪のつくら
梅せしまつやころ中にしも文あかむ

あくまてにこそうつらんはなれ
埋火のあさとにうつる雪消て
雪みえあへすそのひとのとふ里
小野らの路は書をわけてゆく
あせすかなかにあくれのうら
冬ごもりくるはるの梅さく
むかしの庵にもあさき花の
ごりふりの小夜すくなき舊
わかすゝみ雪もちるすそ梅り
年くれまてもなほいつくにかわかむ

壁草連歌

雑

みちはたゝまよふくさへをさむ
わかれのこゝろをうつしも梅の花
世をすてゝ入われよのこゝろ右卿
あはれわか身のくさやわすれ侍る
我身ゆくへしらぬそ別ち
三日月もあかのあふ坂の関もえ
まつ待て入のために
名残そあふ坂やきのの関路哉

あはのうら舟のよそやさ浪風
まちかねしうらやの神もえらまむ
すゝしきなまては桂さいぬめる
あらし吹やかてねさそふ桜にそ
月出しきまゝのなみかせの音
いそなみの名に川白と桜のちる
まさらにやそこなたに袖と
ちかくいましてはてやここく
もゆき来てなにはの舟から
都へかへるなよいそへ川桜乃ちる

水はまくる海はあある浪
都へそこちへはゆくあるらし
さゝ波も清見かすわすれて
心あてにもいはれぬ都鳥
まかせにもめいりて見ゆる
千鳥のいはこえそこなる森
あはれのあらそ祈りまつへん
何かいまてはれぬまそり
花ちるあはれのゝ森乃こえて恋
千草もあまよるもそこへりかるまま

郭公日ふ夏すらの夜ならて
雲ゐ木本にてしのひてくる
末なりぬ夢らぬ月の言葉
ことくは様とや花は言葉
云のいふらす色のみすら
初霧乃野をみる衣かな
うかのくめくはたゆの月
云く神も昔をそ忘れて
きさてもなくれの名
枕の宿の夜はるゝ秋り

たりしをそ梅の林かなしく
旅毎わかれ毎に心の残る草枕
てまてもうつ秋の野をもさ
云ふ知つかひむれなり世のさりてる
露しらくはつなれるしら
草枕旅人のまつ秋て明て
くさの枕は旅うつ人くる
様移りし身こそ梅も旅寝かれし
夜中の露もかるさとろ秋は
そらしらのこゝやさえたるきりの寺

草のはらかりかりまくらとなりけれはさき
なの世とそ思ひ捨ても心とまるや哉
草の袂も枕の旅の枕ときのつ事
昔り衣の宿かりよりつやそれ
あつきくもりてさそのこほりと
こすみく舟やゆふ人つてさしてくれ
こ海うふ人のうそは見えさりけれ
灯よあかき影はそく三なみの宿
すく荷よ三なみうつ浪の様なり
天の小舟のあまや小舟のしるへ

海のうきくるしきをおもひし様なれ
中々色の空と共に上る海よりふかき
らうさいは明のみをつくしの雲にまかれ行は
うき捨てかみをまちてかき海よりふかき
うき世をこぼれて物思ひ世とくる
須磨の浦もすつかる海よりかくる
ありよくさすは道すゑやはらなし
苔筵よそ海も心くれ旅ありて
旅の行そなし物のあはれもそそ
ら梅こそもしは中なるそこら人

心ある人のおしへにて庵をむすひ
こゝろや君かあらしにもせよふし
おもはさしるかれもしらぬの家
霧おほふ松の葉しのきくらへ
ゆくへはしらすたゝむらくもにまよひ
ちかしくす君かおもひしらぬゆへ
ゆくりあさまさにわさ世の中
むかしのはなやかしくまよひ
いつれかまのわかぬれの
武蔵野やわれはまよひまとふ

わかきしりの松のくまにすゑまつ
うきことはいく野をわけぬちまた
春日のわかれもむさしのゝ原
富士の松は松原にかゝる雲井のけむり
むかしの月の雨にそほちて
あさ露にはなにさへしらぬひとく
あすはつまやこひしからむ
よるはおもひの月のかけ君のみ
そのひとをおもひしまはれて
その原の月のかけもなくて

ゆきまされ神徳の風にて
たゝ中え井みの月の光さへ
あすまや見ゆらこゝろみむ
妹かいはひの姫宮とあすまゐく
まいつくとかは方をやまけむ
様あしてうきん和歌きたるあり
あこゝろそゝちしかつれまうすせしむ
西つしはしめのみゆて参らせて
すこしゆそしうて神いあまらる
一筆にてさしいのうましとりやて

あふい梅かえゝら紙ゆきてそれ
わつきつは海のとすゝ山篇て
しらまうしめはもまうさしめれく
雪をもこの海のあいつの波の海
い松くときまて尼い住そうあり
うゑくきてうあいいまのいまかて
急まてたゝ例かり乃松をいてむ
とまそてうとあしあめや海
そそそなりしみむしよ三井さ
石卿いいくへつまおもとこあかて

思ひみなみなより浪の上に
是非のこゝろもうみにしつみて
平家の家なれは月は在明の
思ひをあらしのさ秋の半に
こゝろの月はわか身のうへに
夢も見さりしにさめの楼枕
平家のよにきよき秋の西風
月にいはく浦の音もものあはれに
天も雨や霧この身のうき枕
いかに妻むかしをとはさの夢

千すぢこころを嘆きて人
三年こそ舟に乗そも見るに
むかし浦人のわか秋のなかに
こゝろせくの世をなかれにし舟
まくらよきてもこの清経
舟よりこれあそのわかをたのむ俺
みさえすき海にうものこく
波のうへの海中に舟争
たりふも海のかたふの
弱き舟も平家か濱にうちよせて

都出てこゝろなかれなかりも舟よ
りゐる名なりとやすらひとちきりも色
磯のまくらハ浅ましきも守
ゆくてかすむ浦の波のみこそ
暮かゝる浦のさゝらとうそそすゝ
立ちうかへ暮かゝるたゞ稲の穂の見え
大寺をすきて浦うつ波はそ
稲の穂にむかへしあめかれ舟人
いつか川を見わたせは雲の禅
見渡せはほのほのとあかしの浦の島

いつまて川のめし腹ゆかしたか
秋もなかはしさのまさにほふのたよ舟
まゐりあはれてうらみよりハ松風し
風あらき松のみさゝきをも立そて
うら浦に乞よそ便をたのみけさ
まわりよなくハ津とかまつる舟
ちぎりもまた見えもとをもちハなり
秋もまた夫そなりて式部なれ
みちゆきて浦かくそてすゝ身
舟わたり国衆のしまれなるそ

見わたせはわかれしく心
ちるをまつ人もありや来る年
三とせしらぬやとりふる苔
こまやとらせしありあけの松
ありあけやいつのよりはしめし
あけほのちかき波風そめて
かすみのうちにそらもやいつらむ
夕しめはしきにほひもうせ
一むらさめのかけの海山
風ふけゆくあけのうら

さよふけて浦の蘆屋の月
夜をそまろよあけ海原
ありしきしるしのもしき
まつ清人の波の入
雲たえて松のとまた
いらく松は浦の花
うち花の葉の文
みえぬ世をこゝろの
ことの葉のしらぬも
うちはく楼のわかこのみ

ふたへくをあそはされ折しもさ
りとくわうたうさいはひそもしのはう
あつまをまとかのしかそうさき
ハ海つらて風のそよ吹桜の色
たゝりのうみよも磯さなくあり
住律くまそ川とふきそし様のまへ
御をそらのすまりもとらの色
あらそくつくんなそともろちそへ
天子よりてやんやすめし
小ろへそらしこのやしへまら候

なかくしくもつまてしま
神よいりしこのまつの浦つらし
宮をそてまめたらんいそす
と御法の古御たつ人つてをる
みへるまてく人の西手わ
都ゆやめしのやつまと申御拝
たつ御のたちこ海いらく拝
文言人はらしきよきの関いく

碎草

平田墨梅 二集

平田墨梅真蹟